

歯科衛生士口演

(C会場)

C 会 場

HO-01～05



10月13日（金） C会場 9：40～10：30

HO-01

味覚感受性の低下と口腔機能低下症との関連

矢田 朋美

キーワード：味覚感受性、口腔機能低下、オーラルフレイル

【背景・目的】日本における高齢化は、先進国の中でも急速に進行している。高齢化社会の進行とともに味覚異常は増加傾向にあるが、味覚異常により食べる楽しみが失われ食欲低下や偏食に陥ることは、低栄養状態に陥る可能性がある。一方、口腔機能の維持は経口栄養摂取のために重要であるが、味覚感受性と口腔機能との関連についてはあまり知られていない。本研究の目的は、味覚感受性の低下と口腔機能低下症との関連を調査することである。

【方法】2018年から2021年まで、神奈川歯科大学附属病院医科歯科連携センターを受診した197名を被験者とし、全口腔法にて、水道水・1%甘味水・0.3%塩味水・0.03%うま味水・0.1%うま味水の5種各1mlの味覚検査を実施した。口腔機能を評価する口腔衛生、口腔乾燥、咬合力、舌口唇運動機能、舌圧、咀嚼機能、嚥下機能について、味覚を識別できた群とできなかった群の2群間で比較した（有意水準 $p < 0.05$ ）。本研究は神奈川歯科大学研究倫理審査委員会の承認（No.801）を受けて実施した。

【結果・考察】味覚を識別できなかった群では、舌口唇運動機能が有意に低下していた。一方、口腔衛生や口腔乾燥との関連は確認されなかった。増加する味覚障害患者に対し、舌口唇運動機能を向上することが、味覚感受性を高めることに貢献できる可能性がある。今後、味覚感受性と全身や口腔状態との関連について、さらに詳しく調査を進めていきたい。

【結論】味覚感受性が低下している者では、舌口唇運動機能が低下していることが示された。

HO-03

当院で1年間SPTを継続した患者のブラークスコアとBOPの変化についての検討 ～担当歯科衛生士によって結果は違うのか？～

山中 怜奈

キーワード：SPT、ブラークスコア

【目的】歯周基本治療は歯周検査を通じて患者の口腔環境を把握し適切なプロフェッショナルケアを提供することで口腔の環境改善、健康維持に寄与している。また歯科衛生士による実地指導は患者のホームケアを支えるために欠かせない患者教育でありこれの果たす役割は大きい。そのため実地指導や患者教育の効果を判定し実地指導や患者教育の内容を再検討することは重要な歯科衛生士過程である。今回、我々は良好な口腔衛生状態を患者に提供できているか検証するため1年間メンテナンス（SPT）を継続した患者40人を対象に検査1回目からのブラークスコアとBOPの推移を検討した。また、担当歯科衛生士の経験年数や患者の接し方の違いや歯科衛生士の個性によってブラークスコア、BOPに差があるのか検証したので報告する。

【結果】歯周検査1回目の平均ブラークスコア（以下PS）は53.3%でSPT開始時の平均PSは36.8%であったがSPT開始から1年後の平均PSは40.9%であった。当院においては担当歯科衛生士によって結果に差はあるものの1年間SPTを行った場合徐々に初めのPSに近づく傾向にあった。

HO-02

第三大臼歯抜歯による第二大臼歯遠心ポケットの変化についての臨床的検討

高須 ほのり

キーワード：第三大臼歯、歯周ポケット

【目的】第二大臼歯の遠心ポケットは臨床的な問題をしばしば引き起こし定期的なSPTを行っていてもコントロール不良になることがある。特に第三大臼歯が存在する場合は解剖学的にも健全な歯周組織を維持することが難しい。第三大臼歯の抜歯に関しては明確な基準はなく個々の歯科医師または医療機関によって抜歯の判断は異なるため口腔管理を行う歯科衛生士としては第三大臼歯の抜歯を患者にすすめるべきか迷うことが多い。そのため今回我々は第三大臼歯抜歯前と抜歯後の第二大臼歯の遠心ポケットの変化を比較検討し第三大臼歯の抜歯について口腔管理を行う歯科衛生士として考察したので報告する。

【方法】2022年1月から6月に歯周精密検査を行った後に第三大臼歯抜歯を行い抜歯後に抜歯窩の治療を確認でき再度歯周精密検査を行った患者21名26本の第二大臼歯を対象に歯周ポケットの変化について比較した。

【結果】患者は18歳から53歳で平均29.4歳、女性13名男性8名であった。抜歯を行った第三大臼歯は下顎22本、上顎4本であった。第三大臼歯抜歯前の第二大臼歯の遠心ポケットの平均値は4.5mmに対して抜歯後の平均値は4.0mmであった。

HO-04

VISTA テクニックにおける術前術後の患者マネジメント

土居 桃子

キーワード：歯肉退縮、Vista テクニック、口腔衛生指導

【概要】最近、歯肉退縮を主訴とする患者が増えているように感じる。今回、VISTA テクニックに着目し、術前から術後の口腔衛生指導を行い、歯周外科治療の口腔ケアの重要性についての患者の意識改革に努めた一症例について報告する。

【初診】患者：45歳女性。初診日：2021年8月。主訴：歯科矯正治療後、上下顎前歯部の歯肉退縮。現病歴：なし。

【検査所見】BOP32%、歯周ポケットを有する割合は14%、CALは最大7mm、Cairoの分類はtype2。ブラキシズム（+）、下顎3+3歯石沈着・歯肉の発赤腫脹とクレフトを認めた。

【診断】広汎型慢性歯周炎、（stage II・grade A）

【治療計画】①歯周基本治療：口腔衛生指導 ②再評価 ③歯周外科治療 ④口腔衛生指導 ⑤再評価 ⑥SPT

【治療経過】本症例では、歯周外科治療後のセルフケアに重点を置き、口腔衛生指導を行った。SRP・TBI等を行い、3+3にVISTA テクニックを施し、Wildermanの論文をもとに口腔衛生指導を行った。プロフェッショナルケアを週に一度セルフケアも治療の状態を考慮の上指導した。結合組織移植部位の患部の痛みを軽減するため、止血シーネを使用した。

【結果及び考察】審美領域では歯周組織の状態が治療の成功に大きく関係するため、歯周組織の管理だけでなく、患者の生活習慣・思いなど汲みとり治療方針に取り入れることが重要だ。モチベーションの維持が歯周外科治療の予後に影響するため、信頼関係の構築は必要不可欠だと考える。本症例では、止血シーネを使用したことで術後疼痛レベルを下げ、モチベーションの維持に繋がりを、術後の歯周組織の安定を図ることができた。

HO-05

広汎型慢性歯周炎ステージⅢグレードBの患者に対して、患者の状況に合わせた口腔衛生指導と継続的なプロフェッショナルケアによって歯周組織を安定化させている症例
吉富 友香

キーワード：慢性歯周炎，OHI，モチベーション

【はじめに】モチベーションが低く，ブラークコントロールの技術が低い中等度歯周炎患者に対して，長期的な歯周治療を成功させた症例を報告する。

【症例の概要】初診：2018年1月，62歳，男性 主訴：右上の詰め物が取れた。全身既往歴：8年前から高血圧症でCa拮抗薬を服用している。喫煙歴：42年（1日4本）。

【診査・検査所見】全顎的に歯肉の発赤，腫脹およびブラークの付着を認めた。PPD平均3.7mm，4mm以上PPD 48%，BOP 73%，PISA 1647.6mm²，PCR 73%であった。

【診断】広汎型慢性歯周炎 ステージⅢ グレードB

【治療計画】①歯周基本治療 ②再評価 ③SPT

【治療経過】患者は歯周治療に対するモチベーションが低く，気分の浮き沈みが大きかった。さらに，不器用で刷掃技術が低かった。口腔内写真や検査結果を提示することで，歯周炎を自覚させ，患者説明ツールを用いて治療の必要性和効果を理解させた。また，患者に合わせた単純なブラッシング方法を模索し，口腔衛生指導時に十分に励ました。その上で，不十分なセルフケアをプロフェッショナルケアで補った。徐々に，モチベーションやセルフブラークコントロールが向上し，歯周炎は緩解傾向を示した。現在，SPTに移行して5年が経過したが，PCRは68%と高いものの，歯周組織は安定している（PPD平均2.3mm，4mm以上PPD 1%，BOP 8%）。

【考察・まとめ】患者に合わせたセルフケアをプロフェッショナルケアで補うことによって，長期的に歯周組織を安定化させることが示唆された。